

流人考

亀井 昭

役の行者

伊豆に住むようになって二十年以上になった。今年の冬はとても寒く感じられたのは年のせいなのかもしれない。窓の外に広がる萌黄色に枝を張る木々の間に、相模湾が望まれる。利島と新島の間、三宅島がかすんで見える。この眺望が気に入ってこの断崖絶壁のような土地を買い、ツルハシで二メートル四方の穴を九つ掘り基礎を作った。ツルハシはすぐ壊れてしまう。柄が樫の木でできているのだが、鶴口のように尖がった鉄の間と木のつなぎ目である、金属と樫の木の接続部分、分が弱く、石混じりの土にツルハシを打ちこむと木のつなぎ目がすぐ壊れてしまうのだ。私は樫の木が弱いから壊れるのだと思い、ちょうど良い鉄のパイプを買ってきて、エンジン溶接機で溶接してしまった。それからは壊れず今も使えるのだ。若い頃のバカ力の記念品として、玄関の入口に横に置いてある。若い頃の力自慢の思い出だ。

梅の花が咲き目白がにぎやかに飛び回っている紅白の桃の花ももうすぐ咲くころだろう。桃の花の隣にはタラの芽がもうすぐ目を出す頃だ。てんぷらにすると美味しい。このように私の庭は一つの楽園なのだ。が一人暮らしはやはり寂しくこたえる。特に寒い冬の夜は侘びしい。温かい夏が来るのが待ちどろしい。夏になればサザエやモクズ蟹など海での遊びが楽しめる。

伊豆は流刑地であった。今までも伊豆に流された伴善男のことを『伴大納言絵巻』などを書いたが、今度はもつと古く伝説のスーパーマン『役小角』のことを書いてみたくなった。

役小角は七世紀の末ごろ葛城山中で山伏の修業をしていたようだ。賀茂氏の出とされている。幼いころから物覚えが良く、呪術を使い金峰山と葛城山に橋をかけようとしたが、その地の神『一言主』（ひとことぬし）がそこに住んでいた人々達に、

「役小角は天皇を滅ぼそうとしている」

とふきこんだ。それを真に受けた文武天皇は彼を捕まえようとしたが、役小角は呪術を使い素直には捕まらな。文武天皇は部下に命じ、

「小角の母親を捕まえて、脅せ！」

と命じた。彼の母は捕まり牢に入れられた。

「大人しく捕まらないとかあちゃんは死ぬぞ！」

彼は自ら捕まりに行った。その時のいでたちは垢だらけで汚れた身体に葛の皮で出来た荒く編んだ着物を着ていたようだ。

天武天皇は徳の無い天皇だったようである。天武天皇二年（六九九年）役君小角を伊豆に流す『続記』天武天皇はその他にも五名ほど伊豆に流している。この頃伊豆が朝廷に認識されたようで伊豆の島が出来て来る様子などが擬人化され描かれている。伊豆・駿河・下総・備中・阿波・飢える（「続記」とあるのは辛いことであった。

六九九年伊豆に流された役小角は太陽の出ている間は大人しく伊豆に居たが、夜になると富士山に飛んで行って修業した。役小角は七〇一年都に返されると大陸に渡り虎に変身した。

後の者が大陸に渡り虎の群れに囲まれた。一〇〇匹もの虎の群れの中から、

「ワシが役の小角なりー」

と声が出たそうだ。役小角は陰口をきいた「一言主」を呪詛で縛り、今でも（一言主）は縛られたままだそう

だ。「日本霊異記」に書かれた面白い話だが、「日本霊異記」は薬師寺の僧侶が書いた仏教説話集である。しかし仏教の宣伝広告の役目は果たしていないように思う。この時代の仏教は呪詛で何でもできると信じられていたのだろうか？役小角は大変頭のよい科学者のように思える。昼は伊豆に居て、夜、富士山に行ったのは何故なのだろうか？伊豆の大島に流された役小角は何時飛行能力を身に付けたのか？スーパーマンのように空を飛ぶ役小角の姿を思い描くだけで胸が晴れるようだ。彼はスーパーマンだから此方がどのように思い描いても、いいように思うのだ。

役小角は昼間、伊豆の河津の山で金を掘っていた。河津の金山は東京湾埋立てのため河津の小さな港から運び出され東京湾を埋め立てている。私が釣りに行った山持ちの親子が大きなダンブカーで土を運んで来たので聞いてみた。

「この土に金が入っていますか？」

親父の方が答えた。

「オウよ！入っているさ、東京湾に金山をこしらえているところよ！」

と言いつつ笑った。笑った口の中に金歯が光りさすが金山の持ち主と感心した。

「もつたいないですよね！」

私が言う

「もつたいないほど入っていないから」

と云った。

「もつたいない土はもつと黒い色だから、その中には金がいっぱい入っているさ」

「そのうち東京湾が金山になるのさ」

伊豆は金が沢山ある所だそうだ。隣の佐藤さんも一人で別荘に住んでいたが、暇を持て余してあちこちの伊豆の川を散策していたら、金の粒を拾ったそうだ。見せてくれるといったが遠慮した。見せてもらったら欲が出て此の辺の川を徘徊する様な気がしたからだ。隣の佐藤さんは田中角栄問題があったとき、小佐野賢治さんの乗用車の運転手をしていたそうだ。検察に引っぱられて脅されたと言っていたが、

「俺は何も知らない！」

で通す事にしたらしい。そのうち居なくなってしまうので殺されたのかもしれない。

島流しは関ヶ原の敗戦によって、八丈島に流された、浮田秀家がいる。八丈島の生活は都で華やかに暮らしていた秀家にとって過酷な物だったようだ。明日葉は

この辺にも沢山ある、セロリーの葉のような臭いのする癖のある野草でテンプラにすると美味しい。ツバキ油でテンプラにしたのかもしれないが、少ないコメに明日葉を入れて糧ご飯を食べていたそうだ。それでも浮田秀家は八四歳まで生きた。明日葉は健康に良いのだろう。徳川家康が死んでも関ヶ原の武将が死んでも、浮田秀家は誰よりも長生きしたそうだ。島の自然を愛し島を彷徨っていたという。

明日葉はこの辺にも自生して沢山あったが、この頃はあまり見ることが無い。小さなスコップを持ったお婆さんが道路わきに自生している明日葉を自分の庭に植えて、枯らしてしまうのであまり生えなくなった。スコップを持ったお婆さんは、サンショウの木も若芽を全部摘んでしまった。サンショウの太い木も枯れてしまった。たぶん戦中戦後の激しい食糧難を生き抜いて来た哀しい性がそうさせているのだろう。別荘を持つほどのお金持ちだが、戦中戦後の食糧難は一生忘れられないのだろう。

私は島流しや・島抜け・悪党・時の権力に抵抗するレジスタンスのような話が好きだ。私自身も島流しのような暮らしをし、テレビに向かってブツブツと悪口を言う消極的抵抗者である。役の行者も昼はブツブツ

と不平を漏らしていたが、夜になると富士山に飛んでいき、呪詛を続けた。七八一年富士山は大爆発した。昼は煙が立ち込め、夜になると火が天をこがし、その音は雷のようだ、灰は雨のごとく降り、麓の河は赤く濁っている。と記録された『続日本紀』

『万葉集』にも『不尽を讀む歌』

「燃ゆる火を 雪もち消ち 降る雪を 火もち消しつつ 言ひもえず 名ずけも知らん 靈しくもいます神かな

「万葉集卷三319〜321」

駿河の国が富士噴火の実情を政府に報告した。それに驚いた政府は富士の怒りを鎮めるべく、富士浅間神社の祭祀を始めた。しかし富士の怒りは収まらず政府は卜部に占わせたところ、

「これは疫なり」

「噴火を流行病と断じた」

被害は駿河の国一国にとどまらず、相模の国にまで波及した。疫病・飢饉収まる所を知らず、内裏において卜占が行われた。

「伊豆の国の神の祟りである」

との判定が出た。

「伊豆の二神は三島神・伊古奈神は名神として祀られ

よ！」

との裁定が出て伊豆の二神は長く国によって保護された。富士山の噴火によって伊豆の神々は出世したことになる、役の行者の呪詛により富士の爆発があったとすれば、大変痛快なことである。

役の行者は大変な金持ちだそうだ。昼間は寝ているように怠けていたが、手下に命じて金を掘らせていた。伝説では役の行者の手下は鬼だった。鬼は青鬼や赤鬼、女の鬼や子供の鬼などが行者の手下だった。行者は松の葉を食べ、松の木に着く飴で酒を造り飲んでいたそうだ。松の木には松脂と違う松飴が付く。私は子供の時よく舐めた、あまり甘くなく美味しい。役の行者の欠点は好色な点だったようだ。遊郭に行くことが唯一の楽しみだった。金はあるしムズムズするとすぐ飛んでいった。変身するのである時には若武者に、公家の公達(きんだち)町人の若い金持ち、など化けていくので、しまいには自分が何に前化けていったことを忘れるぐらいだった。

遊郭の朝は早い。朝の六時に起きて昨夜泊っていたお客の送りだしがある。お客を送ると、まだぬくモリの残る布団に一休みして、午前十時起床お化粧をし

て身支度を整えてご飯を食べる。部屋の掃除などは下級の女達が行う。午後二時女の商売が始まる。この頃役行者は何処からか現れる。この前どのように変身していたか考えてなじみの女の所に通う。遊郭の男女関係は疑似夫婦関係なので、浮気は許されない。浮気する場合はお金で解決したりするのでお金がかかる。枚拳にいとまが無い位に細かい決まりがあり、それをめぐって争いが絶えない。最初は遊女の方が威張っている。お客の上座に座りお客は遊女のご機嫌をうかがう。性交はしばらくさせてもらえない。三回位通ってやつとさせてもらうが、あまりの気持ちのよさに通い続けるので、お金が続かず悪い道に入るか、諦めなくてはならない。その点役行者はお金を沢山持っているの、たいそう女に持てたそう。奈良に住んでいたとき、韓国連廣足という官吏が、

「役行者は鬼を使い、呪術を用いて、天皇を呪殺しようとしています。ご用心ください」

と告げ口した。韓国連廣足は役行者に入門して弟子にしてもらったが、役行者の才能にはかなわなかった。もつと努力すればいいのだが、努力しないで出し抜く方法はデタラメをでっちあげて、上の物に云いつける。今でも通用する手法だ。上の者はいつでも何かに怯え

てい、失脚を恐れているからすぐ信用する。役行者は韓国連廣足の謀により、伊豆の島に流された。しかし伊豆のどの島に流されたとは書いていないので、何処でも良かったのではないだろうか、「続日本紀」に書いてあるだけで詳しい事は後の作り話だそう。

おみつ

吉原の女でおみつと言う一五歳の気の強い女がいた。女にしようとなつて来たが、気に入らないので断つていたが、男が力づくで迫つて来たので、そこにあった太鼓のばちで男をぶちのめして殺してしまつた。殺す気はなかつたのだが、打ち所が悪く男は死んでしまつた。殺せば殺される決まりだから、覚悟していたが男が札付きの悪だつたもので罪一等を許されて、八丈島送りとなつた。しばらくは八丈島で大人しくしていたが、吉原の知り合いの男が流されてきたので、一緒に島抜けしようとなつたと相談しその他の男を六人誘い漁師の船を奪つて逃げだした。海はないでいた。波もなく月がこうこうと水面を照らしていた。六人の男たちは代わる代わる漕いで朝を迎えた。島の周りをどうどうめぐりしていたらしく、朝になつて着いた所は八丈島

の浜だった。男たちは島の役人に打ち殺され、お光は捕えられて尋問された。お光が主犯とされて磔の刑にされた。磔にされたお光は黄八丈を着て鉄砲で撃たれた、弾が当たる度に赤い斑点が広がりが黄八丈が血に染まり黄八丈が真っ赤に染まった。お光は死んだ。お光一六歳の春の事だ。

オトヨの場合

八丈島には女の流人が多かった。お光と同じような境遇の少女が多かったからだろう、オトヨもお客を平打ちのカンザシで突き殺した。オトヨ一五歳の夏の頃だった。その時オトヨはふさがちで気持ちが悪かった。男がガツガツ迫ってくるので、

「やめて！やめて！」

とお願ひしたのだが、男の激情はあふれ出して、オトヨの中に入って来た。オトヨは激しい嫌悪感に襲われた。身体が勝手に動き、男の首にカンザシが突き刺さり、客の男はグッタリと静かになり、おびただしく血が流れた。オトヨはカンザシを引き抜いて正気に戻った。身体が震え声をあげて叫んでいた。「誰か来て助けて！私は悪くない。悪くない！」

店の者が来て、役人が来て、オトヨは伝馬町の牢に入れた。取り調べが何日も続き本来ならば、死罪になる所だが、オトヨの殺したあい方の男は悪人でオトヨはまだ少女のような風貌をしていたので、オトヨは減刑されて、八丈島送りとなった。オトヨは吉原で生まれた私生児だから、見送る人もなく狭い島送りの船に乗せられて、気持ちが悪くなり嘔吐しながら八丈島まで来た。八丈に来て島島の役人が囚人の世話をするという事はなく、自活しなければならぬ。オトヨは島に流されてきた男を口説いて売春した。囚人の男達は大店の息子だったり、金持ちの息子だったりする人もいるが、金持ちの囚人は実家から金を送られて来たそう。八丈島に来てオトヨは吉原に居た時のような商売しか出来なかつた。男の流人を相手に売春をしていた。吉原での売春の手はずはお客が来て、最初は顔見せだけで言葉も交わさず、女が上座に座りお客はひたすら女のご機嫌を取る。二回目はお酒を飲み言葉交わすが性交はしない。三回目ぐらいでヤツト性交させてもらう。おいらん級の女との性交に至るまでに掛るお金は、今のお金に直すと二百万円位かかるといふ。廓には廓のしきたりがあり、それを守らない者は住む事が出来なかつたそう。オトヨが出来る仕事

は売春しかなかった。島に流されてもオトヨは売春を始めた。八丈島のオトヨの家には昼間から男流人が並び、行列を造っていた。オトヨの商売は大成功だった。

オトヨが流される前、江戸では『吉原細見』と言うものが発行されていた相撲の番付表のようなものだが、女の顔・人柄、女性器の具合、どの体位が好むとか、細かく書かれていたそうだ。オトヨは『吉原細見』では大関クラスだった。オトヨの家の前には行列ができて、先客がいるときは家の玄関前に竹筒で出来た花入れに、季節の花を飾り目印にしたそうだ。お客は竹筒に入れた花の前で待たなければならぬ。

「まだかいな！ながいなあ、待ちきれない！」

男達はブツブツ文句を言いながら、待っていた。

オトヨは吉原のことが忘れ難く、通ってくる男を誘惑して島抜けに誘った。吉原で私生児として生まれたオトヨは、吉原に通う男を夢中にさせる手練手管・技術を幼児のころから学んでいた。

手練手管は管狐を飼う技術、竹管の中に管狐を飼う狐は困った時に助言したり、予言したりして、遊女を助けるそうだ。寄る辺ない女達はキツネやタヌキ、などの動物霊を信じ「おつげ」を信じていた。

「今晚は好きな人が来て、沢山お金をくれる！」
などと管狐が朝言うとその日はご機嫌で居られる。

手練手管

その一 起請誓紙、わたしはあなたのことをこんなに思っています。二世を誓った仲です。決して別れません。あなたのことが大好きです。などと紙に書いて指をちよいと切り血判を押し、相手に渡すのですが三枚書いてそれぞれに血判を押し、一枚は相方にわたし、二枚目は自分で持ち、もう一枚は神社に奉納するのです。

その二 放爪(ほうそう)生爪を剥がして桐の箱に入れてあい方に渡すのだが、生爪を剥がすのは痛い上に爪が生えなくなるので、妹分の遊女の爪を切り箱に入れて渡すようになったそうだ。

その三 口説(くぜつ)お兄さんが来てくれないので病気になるそうだ。死にそうだ。と手紙に書いて渡す。

その四 起請彫(きしょうぼり)入れ黒子・刺青みたいに見えるが「○○さま命」など刺青風に腕に書くが油性の墨で書くので後で落とせる。

「お兄さんの名前を入れさせてもらったわよ」

などと云って白い腕を見せられると、男は感激して足しげく通うようになるそうだ。書いているのは一人だ

けではないので時々間違いがおこる。前の男の名前を消し忘れていたりすることもあった。

その五 髪切り。男に髪を切らせて誠意を見せ、
「あなた以外髪を切らせた人はいませんよ」

などと云って男をつなぎとめるそうだが、もちろんこのような手練手管は表の手法だろうが、裏の手法は伝わっていないのが惜しい。

オトヨはひょうきんな所があり、笑い話や、艶物話などを覚えてお客を笑わせた。

「この前、神主さんが遊びに来たのよ。行為がおわり、女が立ち上がって紙を持って来ます。と言ったら神主さんは、慌てて「こんな所に神を持ってこないでくれ！」

「素人娘を誘惑して口説いたら、いやだいやだという。どうして嫌がるのかをきいたら、痛いからいやだと言う。「男は、大丈夫今日は小さい方を使うから痛くないよ」しばらく性行為をしていたら、女が叫んだ！あんな大きいのにしておくれ」

オトヨは話し上手、床上手だからオトヨのまわりに

はいつも男がいた。トヨの色香に迷った男たちは綿密に島抜けを計画し、身体を鍛えて臨んだ。月の冴えわたる夜にオトヨ一行は、あらかじめ整えてあった船に乗り出発した。島のまわりの潮流は河の流れのように黒潮が渦巻き、小船は上下左右に揺れた。それに耐えながら船を進めると、島から少し離れたあたりで、荒波は消え、気持ちのよい微風が吹いていた。帆柱に帆を張りロープを調整すると、小船は月に照らされた青い海面を飛ぶように帆走した。次の日、海は荒れた波の上に乗ったかと思うと、真つ逆さまに海底まで引き込まれるかと思う程に荒れた。オトヨ達は五日がかりで神奈川沖に来た。大きな河が流れていた。上げ潮時の河の流れは船を河の中ほどまで運び、川の中州に船を引き揚げてオトヨ一行は上陸した。オトヨは男たちに云った。

「此処まで来られたのは仏様とお前たちのおかげだ。有難う。ずい分きついでを言ってしまったけれど許しておくれ！」

「アネサンよしておくれよ！」
博徒の三吉がいった。

「それよりもここは何処だろうね？」

「そのことよ！この川は鎌倉將軍頼朝公が馬を引き連

れて渡ったという、馬入れ河じゃないか」

「そうだとするならば馬入河、相模の平塚あたりだね」
流れ香具師の友三がいう。

「この川をさかのぼると何処に行くのだね？」

オトヨは皆を見据えていった。

友三がいう。

「大山に行きます」

「大山に行きましよう！」

オトヨは八丈島に流されてから六年が経っていたいま
二二歳だけれど天性の気性の荒さや、気の強さで男勝
りな女になっていた。

「アネサン大山参りはお控えください」

香具師の友三が、

「大山は沢山人が集まるので、検問がうるさいのです」

「うるさかろうが、何としてでも人ごみにまみれて逃
げおうせなければならぬ」

「お前たちも衣服を改めて、なるべく目立たないように
に考えるのだよ」

「アネサン六人で行動するのは危険です。半分に分け
て三人位で！」

「そうだねえ！ここに少し金がある。これを渡すから
勝手に逃げよう！」

オトヨは男達から稼ぎ取った金を少しだけ分け与えた。

オトヨに付いてくる者と、はなれて行く者、ちよ
うど半分になった。大山講は近在の集落から集まるとい
うのではなく、江戸の者好きが少しずつお金をためて、
そろいの白半天を着て大山講や伊勢講などに出かけた
そう。さぞ熱心な宗教心に突き動かされて大山講に
加わったかのようだが、集団が目指す所は買春だった。
講のある所売春街もあった。「古典落語大山参り」もあ

る。落語の話は、江戸の町内で退屈した男たちが相談
して「大山参り」に行く事にした。大酒のみの熊は飲
まないと言うものだから、熊さんも加えて出発した。

行きは熊さんも緊張していたので、飲まなかったが、
帰り、江の島あたりに来ると熊さんは堪え切れずに、
飲んで暴れた。飲んで泥酔していた時に、みんなは熊
さんの頭の毛を剃ってしまった。怒った熊さんは早駕
籠を雇い一足先に帰り、奥さん達を寺の広間に集めて、

「このたびは大変悪いお知らせをしなければならぬ。
皆さんのご亭主は二度とは帰っちゃあ来ないヨ！金沢
八景から船に乗ったのだが、その船が沈んでしまった」
といひ熊さんはヨヨとなきくずれた。おかみさん達
は大変驚き、ひとしきり泣いたのち、

「私も悲しい、私は坊主になったのだから、みなさん

も坊主頭でご亭主の魂を迎えた方がいいと思う」と提案したら、

「私も・私も・」

と言いだして、全員が丸坊主になってしまった。

何も知らない大山参りの一行は家に帰ってみると、かあちゃん坊主頭になっているので大変ビックリし、熊さんを捕まえて制裁を加えようとしたら、寺の和尚さんが止めて、

「これはメデタイ、皆さんけがが無くてめでたい」という落ちだ。

大山参りは大変流行した。月に二十万人ほど来たことがあるそうだ。オトヨも友三も大山参りに扮装して参拝した。

大山参りの中継地は伊勢原だ。大きな寺社の周辺には精進落としての店があり、女を抱えていた所も多かった。オトヨと友三も伊勢原の怪しげな一角に住みつき、しばらく様子を見ていた。島抜けの大犯罪人と悟られないように、静かにしていたが、お金が亡くなったのでオトヨが伊勢原の小さな神社の前の飲み屋で働き、客とはなるべく口を利かないようにしていたら、おかしなものそれが良いとオトヨ狙いで通う客が多くな

った。オトヨは江戸の吉原育ちだから言葉が大分違った。

吉原ではお客の事は〓とのたち

あなたは〓かのさま

バカ〓きんじやきんじゅうろう

けちな客〓しわむしたろう

金を持たずにひやかしの客〓油虫

お酒〓いさみ

腹痛〓むしかたい

くすぐったい〓そこぐったい

吉原だけで固有に使われていた言葉があったようだ。何時の頃からか知りませんが職業や身分によって言葉が違うようになり、支配者にとって支配しやすくなった。

オトヨも江戸弁をなるべく使わないように、早く土地の言葉を覚えるように努めた。それでも江戸から来たお客は懐かしく、話を聞かせてもらったその中には島抜けした男と女の話もあった。オトヨは家に帰ってか友三と相談した。

「江戸ではまだ私達のことを探しているようだよ」友三は面倒くさそうに、

「で―丈夫だ！いま箱根を越える山道を探しているから、きつと箱根越えの道が見つかる！」

「箱根越えは大変だよ！」

オトヨは友三の横顔を見ていった。友三は、

「大変なのは解るけれど、早く箱根の向こうまで行かなくてはならない！」

「言葉も早く相模言葉にしなければ・・」

「相模言葉もいいが、相模女は手弁当で男を追いかけるそうじゃないか？」

友三はニヤニヤしながらいう。オトヨは

「そんなに言うなら相模女を捕まえておくれ、私はどうでもいいんだよ！」

オトヨはすねたように横を向いた。友三は、

「怒らないでおくれ、ただそんな噂を聞いたから、そういうっただけさ」

「怒っていないさ、私も聞いたよ！」

「この辺は平らな土地柄だから、毎日が平らな日が多いってことよ、つまりは退屈な日が多い」

「それは良い土地柄だよ！」

「丹沢山から此方は何も無いその中に河が何本か流れて居て、実り豊かな所だね」

そんなのどかな事を話していたのだが、ある日奉行所

の者だという下級役人風の男が訪ねてきたが、友三は香具師あがりだから、舌先三寸でごまかし、番所から呼び出しがあったら出頭することにした。オトヨと友三は逃げる事を相談した。丹沢山を越えて向こうに逃げることを考えていたが、それは簡単なことではなかった。幸いお金はオトヨが稼いでいたから、当分大丈夫だった。

「お金が無いのは足が無いのと同じ」
と常日頃オトヨが言っていた事を思い出していた。

大山阿不利神社は二二〇〇年前から信仰されていた、山からは縄文時代の土器片が出土したこともある。一二五〇メートルの山容は丹沢山塊から独立して高く、頂上からは江の島が眼下に見える。農業者の雨降らせ祈願や、漁業者の大漁祈願など古くから大山積神を祀っているから、神格は最大で神の中の神として信仰されていた。大山積神はコノハナサクヤ姫の父親だと言われている。

オトヨと友三は伊勢原から大山に出て、大山を迂回する古代道路を探した。古代道路は新しい大きな道路が出来たので、切れ切れになり草木が茂り、獣道のよ

うになつて来た。オトヨは友三に声をかけた。

「此処まで来ればもう大丈夫、役人も追いつけないわ」
しかしそれは間違いだど気が付くには時間がからなかつた。さつきから同じ所を廻つていたのでした。

「オイおかしいぞ！」

友三が叫んだ。

「同じ所を何回も通つてゐるよ。おかしいわねえ」

オトヨも異変に気が付いたようだ。

「おい誰かいるよ！」

「こんな所に人が居るはずないじゃないの」

友三が走り出した。

「オーイ待つてくれ、道を間違えたようだ。助けに来てくれ！」

友三が声をかけ追いかけた男はとても足が速く、頑なに友三の声を聞かなかつた。

「助けてくれよ！頼むよ」

友三の声も哀願風になる。男は立ち止まり友三の方を見た。友三は驚いた。思わず、

「ヒュー」

悲鳴を上げた。友三が声をかけた男は顔中に吹き出物が瘡ぶたになり、顔の一部が無くなつていた。

異様な顔立ちをしていた。友三は(かったい)と心の中

で叫んでいた。オトヨも近づいて来て、案外平気な顔をしてゐるので、友三は安心した。

「私達は(かったい)の道路に迷い込んでしまつたよね。このままこのオジサンに案内してもらつてオジサンの行くところに行きましようヨ！」

(かったい)は、ハンセン病を發症させて、肉体が崩れて変形した様子を言つたらしい。ハンセン病の人は普通の人から嫌われて、普通の道を通れないので、山の中に独特の印を付けて自分達が通れる道造つたそうだ。(失われた日本人(宮本常一)氏は四国を旅行中に山の中で(かったい)の道に迷い込んだそうだ。

「オジサン俺たちも連れて行つておくれ」

オジサンは嬉しそうに笑つたが、顔が引きつつておかしい顔になつた。しばらく歩くとオジサンは漆の木を見つけて、木に傷を付けて白い樹液を集めた。白い樹液をオトヨと友三の顔に付けろというのだ。(かったい)の道路はかったいだけが通れる道だそう。オジサンは漆のかぶれはすぐ直るから心配するなと云つた。

「やれやれ(かったい)になるのか」

と友三が呟くと、オトヨは、

「役人に捕まるよりはその方がましね」

と取り済ましている、

「漆かぶれはすぐ直るから、その方がいいね」

「本当の(かったい)にならないかしら」

「その時はその時よ!」

友三も覚悟を決めたのか、顔や手に漆の樹液を塗っている。オトヨも少し塗った。すぐ赤い斑点が現れて、猛烈にかゆくなくなった。搔くと少し気持ちが良い。だが吹き出物の上を搔くので、ミミズ腫れのように腫れあがってくる。搔くことを止めなければミミズ腫れは全身に広がり熱が出て来る。(かったいの道)は普通の人は見えないが独特の印が付いているようだ。そんな道を通って(かったい)のオジサンと歩いていると、まばらに人影が見えて来た。

「あれが・・・」

と(かったい)のオジサンが指さす方向に小さな集落が見えて来た。そこには(かったい)の人と普通の人が暮らしていた。友三が何か言いそうになったら、遮るようにオジサンが言った。

「あなた達と同じさ。ここに居れば役人にも追われなく、マア自由に暮らせるのさ!」

オトヨは自由に暮らせる事には賛成だが、江戸の吉原のような自由はいやだなと思ひ、友三の方を見たが友三は平気な顔をしていたので、少し安心した。

「役人もここまでは病気が怖くて追って来られないのさ」

(かったい)のオジサンが

「漆かぶれの(かったい)もそのうちに治るだろう」

友三が漆かぶれを搔きながらいう。(かったい)のオジサンはこの集落の親分に挨拶に行こうと誘った。

「親分は嘘が嫌いな人だから、嘘は通らないヨ本当のことを申し上げて、助けてもらうんだね」

オトヨと友三は目くばせし、本当の事は云わない方が良いと思つた。

「(かったい)の逆恨み」

という言葉が当時はやっていた。ハンセン病や悪性の梅毒などで瘡ぶたができて、顔や皮膚が変形した様子を(かったい)と云つたようだ。

「(かったい)の瘡うらみ」

は自分の方が少しでも有利な条件があると、他の人達を笑うことから江戸時代には一般的に使われていたようだ。今はハンセン氏病も梅毒も瘡さえも治つてしまふので、死語になってしまった。

(かったい)集落の親分に挨拶に行く事となった。挨拶は重要な儀礼でとくに初見の間柄では、挨拶ぬきでつきあいは出来ない。一般的な挨拶は、

「おひかえなさって、おひかえなさって！」から始まり、名前は何か、何処の出身か仕事は何か、親分はどれかなどを伝える。もともとはやくざの口上のようなものだったが、一般的にも使われて来たそうだ。手短かに要領よく自己紹介する様式が好まれたようだ。友三は親分の所に案内された。

「此方が親分だ！」

友三は驚いた。きれいな女が座っていたからだ。親分は少し顔をあげていった。

「かのさまは、きんじやきんじゅうるか？」

今度はオトヨが驚いた。

「お前さんはばかものか」

と言っているからだ。何もお土産なしに金も持たず挨拶に来たから、怒っているのだろうと思い、オトヨはすぐに懐の物を全部出して、親分の前に置いた。

親分の名前はアケと云った。親分のアケは顎を少し上に動かした。アケの側に座っていた子分がオトヨの差し出した、巾着を開けて数えた。アケの側に行き耳うちしていた。聞いていたアケは、

「たいそうな金持ちだ。さぞ腕が良いのだろう！」

「親分腕じゃないです。モツチョット下の方です」

子分達はどつと笑った。オトヨと友三はこの(かった

い)の集落においてもらった。友三の漆かぶれは直ぐ治った。

「早く出て行きたいわ！気持ち悪い」

オトヨが小さな声でいうと、オジサンが薄く笑った。

オトヨと友三は一年ほど(かったい)の集落に居たがオトヨが昔馴染みに手紙を書いて金を送って貰い吉原に戻って来た。名前も店も変えていたからしばらくは判らなかつた。昔馴染みがオトヨを見つけて通うようになった。他の馴染みも通ううちに評判となり、

その評判が役人の耳に入り、島抜けのオトヨはあつけなく御用となり、火あぶりの刑に処せられた。オトヨ二三歳の夏だった。オトヨの耳には、アブラゼミの鳴く声だけが聞こえた。

「ジージージージー」

しかしそれはオトヨ自身が燃えている音だった。友三は香具師だから、全国を舌先三寸で廻り、いい加減な物を貴重な物として売り歩き、時々身分を変え職業も変えて演じたので、財をなした。オトヨの菩提を祀った。